



実践の記録◆小学校6年◆

## 「幼さ」を超えるために

—「つづり方以前」から、「つづり方」へ—

<大阪> 増田俊昭

### 1 はじめに

二〇〇七年四月、二年間の宮仕えを終えて、待望の現場での学級担任に戻るようになった。初出勤の前日は、新しい学校、初めての子どもたちを前にするという嬉しさと、緊張と不安で、久しぶりに心が躍った。ただ、昨日まで指導主事として学校に多々モノ申していた人間が、学校に来たということで、きっと職員からはいかにも胡散臭い、といった目で見られるだろうということだけは予想していた。しかし意に反し、それは杞憂だった。ほとんどの人は、私のことなど気にも留めないといったふうだった。このことはありがたかった。裏を返せば、そんなことにかまっていられるほど現場はヒマではなかったということだ。

この「忙しさ」は、要注意だと思った。「子どもの日記、つづり方を見られないほど忙しいなんて、あなたの仕事は、何ですか？」とは、今でも耳の奥に残る言葉だ。ぐっと、気を引き締めた。

### 2 子どもたちとの出会い

始業式、担任発表の後、クラス替えがあったという六年生の子どもたちの反応は意外なほど冷たかった。初対面の私に対する緊張感がそうさせるのはわかるが、通常一時間も話しているうちに少しずつ和むものなのに、なかなかそうはならない。何やら、担任の教師になど何も期待してはいない、そんな雰囲気が漂っていた。

翌日、「会話を入れること」「～ました」で書くことだけを説明した後、前日の日記をもとに書いたつづり方からは、同じような保護者の意向も見て取れた。そして何より、一日も早い文章表現の指導が必要なことも強く感じた。

「無はんのうのお母さん」

修造

きょうのあさぼくはきのうの話と六年一組になったことをはなしてお母さんは無はんのうでぼくはこんんでだいじょうぶかなーと思いながらも朝メシのカステラとミートボールを食べてから六年三組の古山さんと井川さんと同級生の高みやくんをダッシュでさそいに行っていっしょに学校へ行ってまだ時間があったのでぼくは大新（親）友井川くんをさがしに行ったけれどもいませんでしたがとちゅうであってゲームモンスターハンタードスアンドポータブルの話をしていたらチャイムがなってならびました。

ぼくがきのうのことと六年一組になったことを話してお母さんが無はんのうだったのがおどろいた。

「学校の宿題で話したこと」

尚也

昨日家に帰ってお母さんに「1組で男の先生になった」といったらお母さんは、「なると思た」と言っていました。夜にお母さんに話をした。「学校の宿題で学校で合ったことを言う宿題がある」と言ってから「ます田ていう人になった」と言ったら、「うん。」と言っていました。(略) ちなみにAのお母さんは白毛のおっちゃんよりわかい先生の方がよかったと言っていました。

### 3 子どもたちの「幼さ」と対峙して

それからの毎日しばらくは、「六年生にもなって、こんなことも知らないのか」と子どもたちのその「幼さ」に愕然とする私と、「今度の先生は、話が長くて、すぐに難しいことを言う。」と文句を言う子どもたちとの「せめぎ合い」が続いた。

朝の会では、毎朝一人ずつ名前を呼び、元気かどうかを尋ねようとする私と、マンガやゲームの攻略本を読むために、「朝の読書タイム」の継続を主張する数人の子どもたちの「意向」とがなかなか合わなかった。

発表する人は、みんなに聞こえる声で、聞く方は、発表者の方を見てと、授業中の発表と効き方のルールも一から教えた。

まず机を教室の後ろに運んで、それからほうきで掃くのだとか、雑巾は固く絞ってから拭くのだとか、まるで低学年の子に言うような指導もした。

その頃、細々と指示する私を見て、一部の保護者と子どもたちの間に、「教育センターから来た先生は、気ィつけんと、怖いで。」という、テレビドラマと現実とが区別できていないような噂も立ったらしい。ちょっと考えればわかるのだろうが、そんな噂をもまた鵜呑みにしてしまう子どもたちだった。

何でもない作業をさせたり、初めての課題を与えると、これまでに経験したことがないことに対しては、興味、関心を示す前に、すぐに投げ出す子が多かった。決まって聞こえてきたのは、「先生、わかれへん。」という言葉より、「先生、やってエ。」だった。

この「幼さ」の原因はやはり、「忙しさ」という言葉を隠れ蓑に、教えられるべきことが教えられてこなかったからではないか、そう思うようになった。

当然のように、文章表現の状況においても、子どもたちの「幼さ」は目についた。子どもたちの書くものはまさに、「つづり方以前」と呼んでもよいものだった。子どもの思考力、認識力が文章表現によって育まれると考える私などにとっては、いかんともしがたいものだった。しかしこのことはしかたのないことでもあった。まさに子どもたちは、「教えられてこなかった」のであるから。

そこで、毎日の一行日記をもとに、以下のような指導を続けた。

- ①「書くこと」は、「題材一覧表」をもとに、様々な領域から、自分自身が見つけられるように努力すること
- ②「本当にあったこと」を書くこと
- ③時間の順に、「～した。」「～しました。」で書くこと
- ④よく思い出して書くこと
- ⑤当面、「ガーン、それが私がイスにぶつかった音だった。」のように、説明ふうには書かないこと
- ⑥思ったことがあるなら、その思ったことの原因がわかるように書くこと

日が経つに連れ、子どもたちの多くは、乾いた布に、水がしみこむかのように、「ある日、あるところで、あったことで、その時に見たこと、したこと、聞いたことをよく思い出して、順序よく書く」ことを身につけていった。

#### 4 言葉で表現することの快感を味わせたい

昨年度、まさし（仮名）は、99日、欠席した。不登校児と呼ばれ、「怠学」とのレッテルもついていた。「何を言っても、あの子は、来ないよ。」とも言われていた。そのまさしが、新学期になって数日間、ほぼ遅刻もせずに学校に顔を見せた。「まさしの顔見るの、久しぶり。」と誰もが言った。当初私は、昨年度の欠席の理由を知る術もなかった。本人に聞いても当然、固く口を閉ざし、「うざいから。」としか答えなかった。一方、欠席した間の「学力」の遅れは甚だしかった。そのことでまた欠席が続く事になってはと、気を使った。周りの子どもたちも、どことなくよそよそしい感じがした。しかしそれは、しかたのなかったことかも知れない、昨年度の後半は、ほとんど顔を見ず、消息すら知らされてなかったのだから。教科書やノートの氏名欄にはことごとく、「死にたい」と書いた。たとえそれが人の気をひくための一つの表現であるとは分かってはいるものの気になった。人に対して、「死ね」と攻撃の言葉を投げかける子どもは以前にも多くいた。しかし、この子に「死にたい」と言わせるものは一体何なのだろうと、文字の一つずつを消しながら私は考えさせられた。

まもなくややもすれば昼夜逆転、ゲーム漬けの生活に戻ろうとするまさしに、それからの毎日、「学校に来る事がえらい。」と言い続けた。朝、起きれそうにない時は、電話で起こした。それでも来ない時は他の職員の協力も得て、家まで出向いた。

始業式の次の日のつづり方は、まさし一人だけが「白紙」だった。書くことを見つけられないとともに、書く術も他の子以上に知らないのだろうと想像した。少なくともそれまでの一年間、「ひとまとまりの文章」など、書いたことなどないであろうし、おそらく、そんなものを見たことすらないのだろうとも思った。しかしあくる日からは、「昨日のこと、何でもいい、何か一つでも思い出せ。」と、一行日記だけは続けさせた。

- 4/10 めずらしくおこられへんかった
- 4/11 いもうとがめずらしくケンカをうってこなかった
- 4/18 さんプリがうざい
- 4/19 はやくねた
- 4/25 ゲームをしなかった

日記帳は私が学校で預かり、朝や、昼の休憩時時に何とか書かせた。日記帳を持って帰り、家でいったんランドセルから出せば、もう確実にどこかに紛れ込んでなくなってしまうだろうと予想できたからだ。書く内容も、まさしにつづり方以前ではあるけれど、「それでいい、よく思い出した。」と毎日ノートを出すたびに私はほめた。

並行して、家庭訪問を繰り返し、母親と何度か話もした。母親の病気が原因で、何度も転校を繰り返したことも聞いた。一人で施設に入れられていたことがあることも聞いた。昨年度の不登校の原因は、おそらくそんな生いたちにあることが想像できた。現在母と妹との三人暮らしだが、昼間寝ていることが多く、家事についてはほとんどしないであろう母親のことを「あの人」と呼んだまさしだ。しかし、不思議にも母親批判は一切しなかった。むしろ一才年下の妹を「うざい」とはきすてた。

五月の初め、風邪をひいて二日間休んだ。その時の日記には、次のように書いた。

- 5/7 5月1日学校を休みました。そのつぎの日かぜをひきました、（ひきました。）そして5月2日をおきてねつをはかり38・0どありましたのでゲームをしました。

五月の終わりに総合的な学習で、もう一度自分の小さかった頃の話をも自分の家族から再度聞きとることで、自分自身は産まれる前から家族の愛の中で育てられてきたのだということに気づき、かけがえのない自分の命というものについて考えさせたいと、「命の授業」に取り組んだ。初めは、「六年生にもなって今さら何故こんな事を」と思った。しかし仕方なかった、そんなことすら子どもたちには十分に定着していなかったからだ。

助産師さんに人の誕生の不思議さについての話を聞いた後、次は自分の親に自分の誕生の頃のことを聞いてくるようにと指示した。まさしにとっては、その頃も体調がすぐれずにいた母親に詳しいことを聞く術がないことは予想できた。ところがこの時の聞き取りの後のメモには、たった一行、次のように書いた。

(昔の話)

ぼくは、昔 T がくえんにいました。

やはりこの子の言葉を封じ込めているものは、人に言えず、淋しい時を過ごしたというその生い立ちにあったのだと確信した。早速母親と話し、母子手帳や赤ちゃんの頃のビデオがあることも聞き出し、まさし自身に持って来させるように伝えておいた。予想通りまさしは翌日の朝、「先生、こんなん、家にあったぞ。」と得意気に私に差し出した。まさしは、「はずかしいから、みんなに見せなよ。」と笑った。

まさしはその時は母親と十分には話せなかったけれども、その後すぐに、私が母親に聞いたことと、そしてまさし本人がそれまでに聞いて知っていたこととを、私といっしょにまとめて文にした。

(自分が小さかったころのこと)

おれは、1996年6月12日、午後一時三十五分、東大阪の中央総合病院で生まれた。帝王切開で産まれたらしい。体重は、2552gで、身長は、46cm、胸囲は、31・5cm、頭囲は、33・5cmだった。今は大きい方だが、赤ちゃんの時は、大きい方ではなかった。

生まれる時は、おじいちゃんやおばあちゃんや、ちいママ（お母さんの友だち）や、ほかの友だちも病院にきてくれた。「まさし」という名前は、お父さんがつけたらしい。

病院を退院してからは、ぜんそくとかの病気にはなっていない。でもけがは何回もした。今も右目の横にあるきずあととは、2才の時、ガラスに頭をつっこんだときにガラスで切った。

小学校一年の時は東大阪にいたが、二年になって、H市の小学校へ行った。そこでは、いたずらもいっぱいしたが、何でもおれのせいにしたことが今も腹がたっている。

四年になって、荒川小学校にきた。

「これでいいか。」と聞くと、「この通りや。」と答えた。続けて、「今も腹がたっていることとは何かを詳しく」と聞いてはみたが、やはりそのことになると、「知らん、忘れた。」とはぐらかし、固く口を閉ざした。

六月になったある日のことだ。帰りの会の時に連絡帳のチェックに並んでいた順番をぬかさされたという理由で、「学校なんかもう来ん。」とめずらしくすねたことがあった。まさしの不安定な状況はその時の母親の状態が特によくないからだと予想がついた。しかし、周りの子が宥めるのも聞かず、ますます興奮するまさしを私は、「つまらんことで、すねるな。」ときつく叱った。放課後、やや興奮が収まったところで、いつものように日記帳を差し出すとまさしは、次のように書いた。

6 / 5 だれもしんようしません！

まさしは私に、「もうなんもしゃべらん。オレ、前の学校の先生にむっちゃうらぎられてるもん。」をくり返した。しかしそれでも、母親と離れて一人入所させられていた施設時代のこと、そこから通わされていた学校でのことを断片的に話した。本当は話したい、聞いてもらいたいのだ。そう思った。ただその時も、「あの人」と呼ぶ母親には攻撃の矛先は向けない。複雑なまさしの心の中をかいま見た。

それから、「一行日記」は続けた。そのうち、「日記は、簡単や。」と喜んで書くようになった。心なしか、選ぶ題材も多様になり、少しは文らしくもなってきた。

6 / 6 いつもみせてくれないテレビをA（妹）がみせてくれた

6 / 8 あさを（お）きたらめずらしくAがいなかった

6 / 13 きのうたんじょうびだった

並行して全体で進めていたつづり方指導も、少しずつ軌道に乗ってきた頃だった。そこで、「そろそろまさしも、みんなのように、長い文にしては。」と持ちかけた。すると、「これ書いたるわ。」と進んで原稿用紙に向かい、思い出し直しを始めた。

「順序よく、思い出せ」とだけ、私は指示した。

ぼくの（俺様の）誕生日

六月十二日は、ぼくの誕生日でした。

前からおじいちゃんが、「誕生日プレゼント買いに連れて行ったる。」とっていました。

くもんにいる時、ぼくのケイタイにおじいちゃんから電話がかかってきました。おじいちゃんは、

「今どこにおるの。」と聞きました。ぼくは、

「くもん。」と言いました。ぼくは、

「くもん、終わったら電話するわ。」と言いました。

家に帰っておじいちゃんに電話しようとする、先におじいちゃんから電話がかかってきました。

「もう、俊徳の高架の下におる。」と言いました。

おじいちゃんは、四時に家に来ました。

ぼくの誕生日プレゼントを買いに、布施のサティーに行きました。妹のAもいっしょに行きました。プレゼントは、メタルオーブ何とかという、新しい戦争もののゲームソフトに決めていました。

ねだんは七千円とわかったけど、サティーには、在庫がありませんでした。それで、八戸ノ里のコングに行きました。コングでは見つかりました。おじいちゃんに、

「一万円ちょうだい。」と言ってもらいました。ゲームを買っておつりをもらおうとおじいちゃんは、

「おつりはあげる。」と言いました。

家に帰って、みんなで、やきとりを食べに行きました。お腹がいっぱいになって家に帰って、今度は、ケーキを食べました。

九時ごろ、おじいちゃんは、

「また来るわ。」と言って帰りました。

むろん推考は共にしたけれど、周りの子らには満足気に、「オレも書いたぞ。」と言ってまわった。そして、「オレが書いてんから、(題は)『俺様の』にする。」とまさしは言い張ったが、「ちょっとえらそうや。」と私が返すと、「じゃあない。」とすぐに笑いながら引き下がった。まさしも他の子同様、本当は書くことが好きなのだ。

六月の末、まさしが欠席をした。理由が分からなかったので何かあったのかと私は、朝から電話をしたり、きのういっしょに遊んだものはいないかとクラスの子らに聞いたりもした。そんな私を見てなのか、子どもたちもいっしょに、「昨日は元気に学校に来てたのに、今日は何でやろう。」と言い合う声が聞こえた。いつの間にか、まさしの居場所がまた教室に復活しているのを感じた。

明るく日学校に来たまさしに前日の様子を伝えると、「わかった。」と、またこんな日記を書いた。

6/27 火ようびにカゼとねつがでました。

6/28 ぼくは、いつもはだかであてているのでカゼをすぐひきます。

この時も、朝の様子を「順序よく、思い出せ」とだけ言い、それを聞きながら私がメモをし、メモをもとに私といっしょに文にした。

#### か ぜ

六月二十八日の朝起きたら、のどがいたかった。

きのうの晩、はだかで、パンツいっちょでねたからだ。

もうしんどいから、学校休もと思った。

もう一回ねたろと思っとったら、電話がかかってきた。

辻中先生やと思った。電話に出たら、増田先生やった。

「早う、学校来い。」と言った。

「のど、いたいねん。」と言った。先生は、

「今すぐ、五分で来い。」と言った。

無視したろと思ったけど、家に来そうやから、学校、行こと思った。

学校には、九時半についた。みんなが、

「一時間目、音楽室で、めっちゃすすしかってんで。」と言った。

未だに何か行事があると、その前には必ず、「オレは学校休む。」と言わないと気が済まないまさしである。初めのうちはその言葉に振り回されていた私だが、それが母親の体調の都合で弁当の用意や他の持ち物の準備ができないかも知れないと先回りして考えるまさしの心遣いだとわかるようになってからは、必ず前日の夕方か夜に家庭訪問をし、母親と私が話すところを見せることでまさしを安心させた。当日は念のためにと、弁当やお茶は二人分用意し持って行ったが、欠席せずに登校してきた顔を見るなり、「よう来た、えらい。」とほめ、余った弁当はみんながいっしょに食べた。その時の、「先生、だまされたんか。」と笑うまさしの姿は、まぎれもなく小学六年生の顔だった。

夏休みに入る前日、やっとの思いで完成させた学級文集「つむじかぜ」No.1とNo.2を配った。「こんなもんいらん。」と言いつつも真っ先に見ていたのは、自分の作品があるページだった。安心したのかまさしは、宿題やプリント類はそのまま、文集だけはすぐにかばんに直した。

## 5 「幼さ」を越える

四月の初め、何かにつけ、「うざいねん。」とはきすて、学校、ましてや教師に対してなど信用のかけらすらないという態度を示していたまさしだったが、ここに来て、少しは心をひらいてくれたのかも知れない。しかし、昨年度学校を休むことになった本当のところ、また母親への現在の思いや願いなど、固く口を閉ざしてしゃべらないことはまだまだ多い。まさしは自分の本当の心の内を明らかにするほど解放されたわけではない。時折見せるかげりのある顔と、回数は減ったものの「死にたい」と投げ捨てるように発する言葉がそのことを物語っている。このことを、まさしの「幼さ」と一概に言い切ってしまうことに無理があることは百も承知だ。意味が違おうと指摘されるかも知れない。ただ、言葉で本当の自分を表現する、ましてや書きことばでそれを行うことは、まさしにとってはまだまだ先のことになるだろう。相変わらず、「つづり方以前」の状況は続いたままだからだ。自分の言葉でものごとを認識し、そのことで思考力、さらなる認識力が育まれるというのであれば、まさにこの意味でまさしもクラスの他の子同様、まだまだ「幼い」状態のままだ。

残された後の半年で、この「幼さ」をどこまで乗り越えさせられるか、それが今後の私のこの子に対する課題だ。

### (追記)

夏休みに入ってからのもさは、「絶対行けへん。」と話していた林間学舎にも予定通り参加した。八月六日の平和登校日には、前日確認しなかったにもかかわらず早朝から登校した。

しかし一方その後、時折中学生らとゲームセンターに入り浸ったり、警察にも何度か注意を受けているということを中学校の生徒指導担当から聞いた。本人に電話で確認すると、「何で知ってるねん。」と返答した。また不安定な状況にあるようだ。

(新・つづり方通信第8号 2007/9/14より)

